

「夏色の記憶」(葉隠れの里でつばぜり合い)

大袈裟にいうと、たかだか4分間の試合のために高校剣士たちは命を賭ける。剣道の精神や技を修練体得してきた時間にくらべるとまるで瞬間のような時間だが、技や精神を一気に爆発させ、相手から一本を奪い取るには気の遠くなるような時間と経験の蓄積が欠かせない。スパークするには高い電圧が必要だからだ。剣士たちは用意された三日間のステージのために今やっと地上に這い出してきた蝉みたいなものだ。そして、そんな高電圧、高気圧の高校剣士たちが今年は佐賀の地に集結するわけである。はたして今年は何んなドラマが待っているのだろうか？

インターハイ出場を決める徳島県予選の男子団体では徳島文理高校が阿南工業高校との熾烈な決勝戦を制して代表権を手に入れ、女子団体では前評判どおり富岡東高校が富岡西高校との県南対決に決着をつけて連続出場記録を更新した。また男子個人では2年の福川(阿南工)と3年の西田(那賀高)の相生中学出身同士が共に代表選手となり、女子の個人でも細川、横山の富岡東のチームメイト同士が全国に挑む形となった。暑い徳島からそれ以上に暑い佐賀の会場まで選手たちは防具や竹刀や誇りや期待や宿命が詰まった大きな荷物を運んでいくのである。おそらくは南国のじりじりと照りつける太陽が選手たちを責めたて煽りたてることになるだろう。

たかだかの4分間のために親は子供の応援に出かけるようだ。ひょっとしたらそれがもう少し長い時間になる可能性はあるにしても、それはたかだかのレベルである。しかし高校生にもなれば、親子で共有の時間を作る機会などそうそうあるわけでもないから、親にとってもたかだかの4分間は貴重な4分間だとも言える。そのために親は遠征費用と時間を工面し、気の遠くなるような長い船旅に身をまかすことも厭わない。

ある親は8/5の午後2時すぎ徳島の津田港から単身でオーシャンフェリーに乗り込んだ。目指す北九州の新門司港には明日の早朝5時到着予定である。東京へは一度乗ったことがあるは逆方向は始めてだ。時間はかかるが運賃が安いのがありがたい。まあビールでも飲みながら本でも読んでたらそのうち着くだろう。一緒に乗船したのは、孫ふたりを連れてお婆さんと、ポルトガル旅行に向かう娘さんとの5人である。一万tクラスの船はけっこう大きい。乗船を促されてタラップをのぼると、中年のおっさんもちよっとした旅人気分である。白いデニムのバッグの中身は着替え少々、本と雑誌が一冊ずつ、あとは港近くのコンビニで仕入れた食料など。やがて大きな汽笛が「ボウー」っと鳴って、フェリーが岸を離れる。船上から見下ろすと見なれた街がいつもとは違う風景に見える。旅人の頭の中にはこれから向かう旅先の風景がすでに映りこんでいるせいで、

いままでの日常風景がすこし歪んで見える。ポルトガルへ向かう娘さんが見送りの家族に大きく手を降っている。お婆さんは孫の手をしっかりとつかみ、子供はその手をふりほどこうとする。人数は少なくとも、出港時のよくある光景である。やがて船は船本来のエンジン音を響かせながら外洋へと舳先を向けた。船内に入ると東京から乗り込んだ乗客がそこそこいる。空いている二等船室に居場所を確保して見渡すと、約3畳に一人という人口密度であることがわかる。さびしくもなく、窮屈でもなく、これくらいがちょうどよい船内空間である。

乗船客としての自己確認ができると、後はすることがないのでごろんと横になって本でも読むことに。子供達が騒いでいる以外、他の乗客も横になって寝ているか本を呼んでいるかテレビを見ているかである。さすがにバットを振ったり、エクササイズに夢中の人はいないようだ。読みかけの内田樹他著の「9条どうでしょう？」を読みはじめる。しばらくするとちょっと船が揺れ始めた。「大平洋に浮かぶ木の葉」というほどの大きな揺れではないが、洗面器にうかんだ落ち葉程度の揺れを感じる。なんとか本を読み終えて船内探検に出かけようと立ち上がると軽いサーフィン状態。ひよっとしたら室戸沖の荒波に揉まれているのかも知れない。自販機で缶ビールを買い、船室に戻るとやがて夕食レストランの開店放送が流れる。6時〜7時半までの営業らしい。7時前くらいにレストランまで降りて行く。途中の航路案内図には、7時頃には高知沖、9時頃には足摺岬を廻って日向灘に入ると表示されていた。かれこれ3分の一の航海をこなした勘定だ。でもまだまだ先は長い。ヒレカツ定食に缶ビールの夕食。

やがて揺れも収まり、船内は徐々に夜のムードになっていく。展望風呂で汗を流した乗客たちがタオルを肩に戻ってくる。船室に重なった毛布を布団がわりに二〜三枚持っていく人もいる。日曜夜の人気番組の笑い声を聞きながら、再び横になり月刊プレイボーイ誌9月号のブラックミュージック特集を読む。アトランティックレコードの軌跡やピーターバラカンによるナイルロジャースへのインタビューなどあっという間に読み終えた。そうこうするうちに消灯の時間がやって来た。後は朝の五時までなすすべがない。仕方なく目を瞑ってみるが、10時前から眠れるわけもないしね。あっちに寝返りをうちこっちに寝返りをうちながら長い長い夜を堪能することになる。たぶん船がローリングする数より寝返りの回数が多かったのではないかしらん。

辛抱の甲斐があって、やっどこさ北九州に着いた。車のない乗船客は300円で予約しておいた乗り合いタクシーで門司駅まで送ってもらう段取りだ。やっど空が白み始めて、南国特有のむっとした熱気がだだっ広い港内に充満している気配がする。昨日は北九州でも夏祭りがあつたらしい。四国に親戚があるという運転手さんと話しをしているとあっという間に駅についた。夕方の開会式にはまだまだ時間がある。

レトロな門司港が観光スポットらしいと知って、半時間ほど待つ門司港行きの電車に乗る。古風な駅舎に降り立つと切符売り場やトイレまでが昔ながらの佇まいである。いつの時代の様式なのかはわからないが、かすかな記憶の先に繋がるなつかしい風景のように感じる。昔風な凝った字体の看板がそれぞれの部屋に掛かっている。広場になっている駅前の向こうに煉瓦造りの建物が見える。その先は関門海峡だ。税関や海運会社の建物が保存されている海沿いの道をゆっくり歩いていると、物や人が活発に行き交った当時の賑やかな様子が想像された。海岸に据えられたベンチで休んでいると、対岸から今日のはじめての連絡船が着いたようだ。時間はまだ朝の7時を少し廻ったところである。何枚か写真をとった後また駅まで戻り、通勤客に混じって小倉方面に向かうことにした。約1時間あまりの港町散歩であった。

15分くらいで小倉着。新幹線が停まるせいかそこそこ賑やかな街だったが、駅前にこれといって変わった表情はない。汗をかいたので駅前のやや高級な喫茶室に入って休憩すること1時間半、9時半すぎまで粘る。汗も引いて外に出るのに気が重いが、そろそろ上階のモノレールでメディアドームをのぞきに行く時間だ。時間つぶし（次官つぶしも流行ってるが）と函館記念競輪の車券購入が主な目的である。（他にどんな目的があるっちゃんな！）三駅ほど先の下車駅で降りて照りつける太陽の下を巨大なドームの屋根を目標に10分ほど歩く。汗が吹き出てハンカチが生暖かいお絞りのように変貌していく。やっと到着してひんやりした冷房の穴場でしばしの博打生活。5レースほどで少し持ち金が増えたのは上々の出来である。ということでタクシーに乗り、駅ビルの回転寿司屋で生ビールと馬肉の寿司などの贅沢。このあたりの行動は嫁には絶対内緒の秘密である。そろそろロクデナシの行状を切り上げて佐賀に向かわないといけない。ロッカーに仕舞っておいた荷物を出して、新幹線のホームに向かう。博多まで新幹線、そこからは長崎本線の特急で佐賀入りの予定だ。博多のホームには高校総体に出場した（する）と思われる高校生たちに大勢遭遇した。それぞれにアスリートらしい生き生きした表情である。ハウステンボス行きに連結された特急の指定席に乗り込むと、なんの種目か知らないが監督に引率された女子高生が数名、近くの席に乗ってきた。彼女たちもまたこれからインターハイに出場する選手たちのようだった。やがて電車は筑紫平野を突っ切って佐賀に入る。何年か前に車で訪れた吉野が里遺跡が右側に見える。炎熱にけぶったような公園に今日も人が歩いていた。さぞかし暑いだろうと思う。やがて平野の真ん中にまとまった街並が見えてきた。どうやら佐賀市らしい。三時すぎ、やっと現地到着。北口よりタクシーで会場まで。「総体関係のお客さんばかりです」という運転手の話しが終わる終わらないかのうちに会場に着いた。

降りた目の前に大きな建物があったので体育館かと思ったらどうも文化会館らしい。隣接した木立の中にある奥まった建物が会場の体育館のようだ。道の反対側はスタジアムで今しも陸上競技の真っ最中である。剣道も夕方の開会式を皮切りに三日間の激闘が始

まる。夏真っ盛りの佐賀の地はインターハイの真っ盛りでもある。早くも会場周辺は胴着や袴を付けた剣士にジャージ姿の応援部員、付添いの先生方や保護者たちでごったがえしている。駐車場も満杯で、記念品やお土産売り場にもたくさんの商品が並んでいる。まだ入口は開いていないが、大勢の人がハンカチとうちわを片手に体育館の正面広場に並んでいる。耐え切れないほどの炎暑である。係員の役員や生徒たちが必死に夏の苦役に挑戦している様子は、押し忍ぶ葉隠れの精神が熱気と狂躁の中で試されているようでもある。我々もまた忍ぶしか手がない。

ひょっと顔をあげると選手を引率してくれた K 先生と S 先生や S 先生が立っていた。「お世話になります」と挨拶をかわす間にも、お互いの顔に汗が吹き出す。木陰の下には富岡東の保護者の面々も来ていた。これだけ大勢の人ごみの中でも、顔見知りはずぐに見つけられるものである。徳島県人には徳島県人独特の匂いや雰囲気があるのかも知れない。お互いの健闘を誓いあって別れる。やっと入口が開いたようだ。どっと人波が体育館に吸い込まれていく。観覧席に上がるともう満席である。かろうじて正面左サイド、野球場で言えば一塁側の内野席最上段に席を見つけて座る。ジャージ姿の女子生徒数人が並んだその末席である。バッグからビデオカメラを出して準備。うん？映らんではないか？この大事な時によりによって故障発生とは！！なんとかだましましビデオを操作するが断片的に映像が映るだけで、なんとも情けない。おかげで開会式にも集中できない。入場行進の時だけなんとか徳島県チームを映せたのがせめてもの慰めである。あいかわらず息子は列の最後尾で「のほほん」な表情である。

ちょっと場内のスピーカーの音声レベルが低いようだ。せっかくの挨拶も選手宣誓もうまく聴きとれなかった。ちょっとした加減だろうが残念である。まあこれだけ大きな大会ともなると、いろんな不具合も出てくるのかも知れない。1時間半あまりの開会式もなんとか終了。うまくビデオは廻らなかったが、その場に居合わせた時間は選手や家族達にとってのかけがえのない財産である。延べにすると50万人ちかくがこの総体に訪れるらしいが、そのひとり独りが土産と共に貴重な思い出の時間を持ち帰ることになるのだろう。式の途中で、隣の女生徒軍団は栃木の文星芸大付属の剣道部員と判明。「実はうちの息子が栃木の代表とあたるんですよ」と話したら驚いていた。

玉龍旗からずっと栃木を離れての遠征生活はさぞかし大変だろうと思うが、彼女たちは元気一杯でなにかと中年親父の質問に答えてくれた。

会場から出るとまた灼熱地獄である。ひとり身の気楽さで、佐賀駅まで歩くことにする。今日は南口のカプセルホテルに予約を入れてある。駅前の居酒屋でも夕食を食ったら、一汗流したい。そう思いながら佐賀のだだっぴろい街並を汗を拭き拭き歩き続けた。タクシーだとあっというまの距離も、暑さと不案内のせいで予想以上に遠い。やがて雲行きが怪しくなった。もうそろそろ駅だという頃にととう雨が落ちて来た。夏の雨は猛

女のように激しいらしい。あわてて通りかかったタクシーを止めて「南口」を指示。数分後に雨は夕立ち特有の豪雨となった。タクシーが佐賀駅に着くと、構内は夕立ちに足留めをくらった人たちで溢れていた。思わぬ夕立ちで駅前に賑わいの空間が演出されたという雰囲気である。駅に隣接して居酒屋チェーンのネオンを発見。この雨ではうろうろするわけにもいかない。まだ人(ひと)気の少ない店内に入ってハンカチで頭をふく。やれやれである。ビールと焼き鳥と刺し身で今日の疲れを慰める。やがて客も増えたのでそろそろ退散しようとしてレジで精算をすませ、入口へ一歩あるいた瞬間だ。急にドレーンと天地がひっくり返った。ホールの段差を踏み外して見事に転倒したのである。レジ横のポスターが破れて右手にひっかかっている。心配顔の店員も半分は呆れ顔である。入店の時に注意はされてたのに、酔いも手伝ってすっかり段差を忘れていたのだ。恥ずかしい。自嘲気味のはにかみ親父はあわてて店を飛び出した。

外はあいかわらずの大雨である。すぐ近くのホテルへも傘なしでは無理だ。駅のコンビニで雨傘を買い、それを片手にホテルへ向かう。総体出場の高校生が入口に大勢いて、歓迎の名札にもあちこちの高校名が書かれてあった。今夜の佐賀市内のホテルはどことも似たようなものだろう。一部がカプセルホテルになっていて、そこだけが空いていて、そこで泊まるのだ。ロッカーに荷物を入れ、部屋着に着替えて風呂に行く。夜はまだ長いがこの雨ではどこへも出かけられない。仕方なくカプセルにもぐりこんでテレビを見ながら手持ち無沙汰で退屈な佐賀の夜に付き合った。何回か目を閉じ目を覚ますとしぶしぶ朝がやってきた。もう一度朝風呂に浸かって出発の準備。昨日の雨が嘘のように今朝も眩しい太陽がギラついている。今日はいよいよ戦いの当日である。

会場に着き、入場整理券を胸にかける。午前中は女子の団体予選で、入れ替わるように午後は男子の個人予選が始まるのだ。場内はほぼ満員で昨日同様空いていた一席を見つけて座る。隣は昨日と違って男子生徒が並んでいる。「どちらから？」と聞くと「栃木です」との答え。「ひょっとして北條君の?」「はい、佐野日大です。北條の応援に今日来ました。奇遇とはこのことである。この広い場内の隣合わせに、対戦相手の応援団が肩を接して座っているのだ。北條将徳君と西田義玄は全中の団体決勝リーグでも小山3中と相生中の先鋒どうしで対戦している。剣道人生での二期二会。いわば因縁の対決である。そしてその応援団がたまたま観覧席でもあいまみえているのだ。向こうも驚いたふうだったが、こっちは昨日と引き続き栃木勢と同席したことに運命の不思議さを感じて(それほど大げさなものでもないが)ちょっと興奮状態である。北條君のチームメイトたちは青年らしい闊達さでいろいろ話に乗ってくれた。

やがて女子の予選リーグが始まった。黄色い声が場内にこだまする。竹刀の触れあう音、踏み込んだ足音、身体がはげしくぶつかりあう音がいりまじり、会場はまさに戦場そのものである。観覧席からも拍手や歓声がわきあがり、それぞれのチームが必死で予選の

勝ち抜けを狙う。その気迫が場内に充満する。残念ながら徳島代表の富岡東は今一步のところで勝ち抜ることができなかったようだ。やがて観覧の制限時間が来て外にでる。隣の文化会館のロビーに避難してソファーに座っていると、隣から阿波弁が聞こえてきた。それもどこかで聞き覚えのある女性の肉声である。気になってふと横を見ると、息子の中学時代の剣道の恩師 F 先生がタオルを首に座っているではないか！ぎょっ！ぎょっ！驚いて見合わず顔と顔。「来てはったんですか！？」「そらもう^^」いつものおどけた口調である。教え子がふたり出場しているとはいえ、はるばる飛行機をチャーターしての佐賀入りはさぞ大変だっただろう。おまけに昨日は炎天下の中を吉野が里遺跡見学としゃれこんだが、汗だくになりへばったとのこと。夜は同僚の先生方に誘われての飲み会だったらしいから、昼夜にわたる過酷な強行軍ということになる。にもかかわらずニコニコと元気な笑顔を見せる F 先生であった。

突然、ケータイが鳴った。高校一、二年とお世話になった O 先生から、もうすぐこちらに着くとの連絡。わざわざのありがたい応援である。O 先生には剣道の基本と人間としての心構えを教えていただいたが、果たして本人がどれだけその成果を身につけることができたのだろうか？たぶんその内実が試合の場で問われることになりそうだ。ロビーでは富岡東の I 先生や、大会役員で参加している H 先生などにもお会いした。それぞれがそれぞれに暑い佐賀の夏に立ち向かっている様子だ。

そうこうするうちに O 先生が到着。特別に配布された入場券を手にとり F 先生と 3 人で会場に向かう。まだ女子の団体予選が続いているものの、そろそろ勝者敗者の選別が終盤を迎えているようだ。喉が渴いたので入口の自動販売機にお茶を買いにでかけたら、埼玉栄の女子チームの主将らしい選手が、涙を浮かべながら敗戦の挨拶をしていた。三つに二つは予選を勝ち上がれないのだ。たぶん会場近くのあちこちでこういう光景が見受けられたのでないだろうか？泣きながら挨拶をするキャプテンの涙が炎熱の太陽の陽射しを反射させながら汗の上をつたう。彼女たちの夏は終わったのだ。その周りで選手たちに温かい拍手を送る保護者たちもまた、涙をふきながら夏の脇役を返上する儀式への参加である。

予定時間を過ぎて、女子のベスト 16 が決まった。いよいよ男子の個人戦が始まる。背中に文字をプリントした揃いの T シャツを着た強豪チームの応援団が観覧席のあちこちに陣取っている。おそらく団体戦と個人戦の両方にエントリーしているチームも少なくないはずだ。北海道から沖縄まで日本全国から、選手たちの一本の技、一勝の栄誉を見届けるためにこれだけの人数がこの体育館に結集しているが、そのうちの約三名は息子の応援団である。数では劣勢とはいえ期待だけは他の応援団に負けないつもりだが、果たしてその期待が結果の一本、一勝につながるかどうか。買い求めた冊子の強豪の名前がひしめくトーナメント表にはまるでピラミッドの頂上に登るような険しい道筋が上

の方に伸びている。100名に満たない各県の代表選手は自分の気合いと技だけを頼りにその崖をよじ登ることなる。息子は1コート7試合目の登場だがはたして一段目の崖を登ることができるのだろうか？相手は栃木佐野日大の北條将徳選手である。まるで戦国武将のように強そうな名前だ。西田義玄（よしはる）という名前もそれなりに古風な趣きを持つが、こっちは禅宗である。名前で戦えばやや不利かも知れない。各コートの熱戦に目を奪われているうちに、息子の試合がやってきた。

一回戦目からもう決勝戦のようなものである。普段以上の力を発揮しないととてもではないが勝ち上がりはむずかしい。「始め！」の声がかかる。さあ、いよいよ運命の一戦である。毎度のことながら動きが悪い。